「神統譜から国生み神話」を通して

発生論から

西條　勉

〔1〕言語表現が日常の言語行為に解消されずに自立した構造を持つとき文学（詩）は成立する。発生論的概念としての「詩」は本質的にも始原的にも言語表現の固有な構造として定義づけられる。

〔2〕言語表現の固有な構造とは韻律をさす。韻律は言語の表現を特定の構造へ回帰させることにより表現に自立性を与える。韻律表現は様式としてではなく構造即ち意味を生み出す機構の問題として考察されねばならない。

〔3〕文字表記（エクリチュール）以前の韻律表現はカムコト・コトワザ・コトド・ノリトイハヒゴト・ヨゴト等のコトに残滓する。フルコトはこれらを概念的に包括する名称である。コトは自然の顕在化である（コトドヒ）と同時に自然を人間の意味体系に転換する作用をも示す（コトムケ）。コトは自然に属するとともに意味によって拓かれた領域である文化にも属する。コトの根源的両義性。

〔4〕コト表出における《自然／文化》の関係はカミの表現構造に集約される。発生論的概念としての「自然」はカミの表現構造の視座から考察されねばならない。

〔5〕自然はそれ自体の生命原理を持ち人間とは非連続の意味体系に属する存在である。それは文化の外側に測り難い厚みをもってそれ自体で活動する現象（名辞以前（フェノーメン））である。

〔6〕〈人間・意識〉は自然の充足性に対し自己を欠如性・不完全性として疎外しこの異和の自己疎外を根拠の獲得によって止揚しようとする。それは何ものかの根拠なしには存在し得ない。その根拠は自己充足的なるもの即ち自然に求められ自然との連続性が志向される。

〔7〕霊格チ・ヒ・ミ等で表象されるカミは自然の言語的対象化である。カミは蛇・雷・鳥・葦・榊等の動植物により隠喩的に表象される。動植物は人間に対し非関与的な生命原理によって活動するゆえに自然の範疇に属する。他方それらは人間が自己の生命原理を客体化するに際し媒体の役割を果すことができる。動植物は自然と文化の意味的対立を克服するための媒介項としてカミの名辞を与えられる。

〔8〕隠喩は意味の水準に向いつつ意味以前の現象（フェノーメン）を表象する。カミにより隠喩化された自然は意味によって切り拓かれていないゆえに〈未開〉として存在しまた未だ何ものも失われていないゆえに〈豊饒〉として存在する。その未開性と豊饒性は時間的にも空間的にも始原として象徴化される。

〔9〕人間の意味秩序は自然に起原づけられ自然との連続性において文化の根拠（始原）が構築される。神話的時空は世界の総体を始原に回帰させ自然との非連続性を克服する論理によって構成される。

〔10〕古事記冒頭の神統譜は生命原理・原初生命・原初大地・原初人間の生成を隠喩的に表現し文化と世界の創造者である最初の人間を自然の生命原理（ムスヒ）との連続性において起原づける。国家神話の水準でコトのもつ根源的な両義性は最も極限的な形で表象される。その極限化のなかに〈古代〉が所有し得た観念の総量がある。